エンダ

日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エンダ

【Ｎコード】
Ｎ８２７４Ｘ

【作者名】
日葵

【あらすじ】
繰り返される毎日に、気持ちがすり減る日々。何の為に、誰の為に生きているのかすら、分からなくなっていた。でも、だからと言って・・・ここから逃げ出して、この扉を開けるなんて、私には出来ない。

※別サイトで同作品を掲載しております。現在８章まで掲載中です。

第1章　Usual　spot－1

二年程前から、自分の存在価値について考え込むようになった。もっと言えば、全てが虚しい。生きる価値を見出せない自分に気づく。

一番の原因・・・それは分かっている。　三年前、突然襲った母の死。それからだ、全てが虚しくなってしまったのは。

亡き愛する人を思い出すのは辛い。辛いのに、毎日思い出さずにいられない。

私の母は本当に苦労人だった。　働かない父親のせいで、幼い記憶の中の母は、一日中働いていたように思う。

母の記憶は、私の胸をこんなにも苦しくする。飲んでは暴力を振るう父親から、いつも守ってくれた母。　無償の愛・・・母から受けたこの愛で、私はこの世界で生きる事が出来た。　父親が亡くなって、ようやっと親子二人で心穏やかに暮らせるようになって、いつも私が、

「いよいよこれからお母さんの人生だよ。」

なんて言うと、

「今までも自分の為に生きてきたわよ。」

そう、そっと笑う人だった。そんな母が大切で、大好きで、愛していると、ありがとうともっと伝えれば良かった。　もっと伝えたい事は沢山あったのに・・・。

その都度、別の私が叫ぶ。

『こんなに囚われる事を、母は望んでいない。』

はぁ・・・もう三年も経つのに、一体いつになったら、母の事を暖かい気持ちで思い出せるのだろうか。昨日まで話していた声が聞

けなくなって、大切な人が突然いなくなって・・・。　寂しい。虚しくて堪らないのだ。私はこれから、寂しく長い人生を送しかない、そう思わずにはいられない。

今までは、どんなに居た堪れない気持ちに陥っても、帰れば母がいた。そこには、私が帰る場所が確かにあった。それが当たり前だったあの頃。一人じゃなかった、あの頃。　母の死後、私はこの都会でたった一人だ。生きて行くだけの人生を送っている。大げさと思われるかもしれないが、心の虚無感が私を負の感情へ押し流す。

それからの私は、

「孤独」

この言葉に、都度苛まれるようになった。

勿論今の状況は、母の事だけが原因ではない。　仕事、友人、恋愛、結婚の事、全てにおいた将来の自分。女三十代。結婚の予定も無い。あるとすれば、社歴だけが長くなる仕事だけだ。

生きていく以上は、どのような立場であろうと働かなければならない。それが社会だ、というか現実だ。

実際、　私の仕事は忙しいほうだと思う。　毎日、毎年同じだ。数字の積み上げを行い、期限通りに仕事を上げなければならない。経理事務員として毎日二十一時位の帰宅時間となる。遅くも無いが早くも無く、そこから自分の為に何が出来るのだろうか？そんな余力があるのなら、明日の仕事の為に取っておきたい位だ。

一体誰の為に、何のために走り続けているのか？　誰かに教えてほしい。　私がどこに向かっているのか。　・・・馬鹿な自分。全ては自分が選択してきたことなのに。

そして私は、何だ、何なんだ。そう自問しながら、今日も眠るのだ。

第1章　Usual　spot－1（後書き）

第1章　Usual　spotは主に主人公の女性の心の葛藤を書かせて頂きました。
少し重たい章になっておりますが、　ここからストーリーが繋がっていくのかと思うと、今からドキドキしています。　それでは、楽しんで頂けるように日々精進致します。　宜しくお願い致します。

第1章　Usual　spot―2

「今でなくてはいけませんか？」

声のトーンを落とし、眼前の上司を挑発しないように、私は静かに問うた。しかしそんな気遣いは全て無駄に終わり、耳障りな声が響く。

「当然だろう！！人を育てるのに、時期なんて関係ないと思うが？　優秀な！優秀な人材にチャンスを与えるのは、会社の義務だ！！」

入社して数カ月ばかりの新人に、大きなプロジェクトを任せようという話だ。必要以上の怒涛に、思わず皆が振り返る。その視線を背中に感じながら、更に声のトーンを落としながら、

「でも、まだ日常の仕事も覚えていませんし。　出来れば後数カ月、お待ち頂いても宜しいでしょうか？」

そこまで広くないフロアの中で、眼前の上司はテンションを上げるかの様に更に声を張り上げた。

「はぁ～？君に聞いているのは、ただの確認なんだが。彼が持っている仕事を君が出来るかどうかをだ。」

興奮している上司の声は、フロア全体に響き渡り、背中に感じる周囲の雰囲気は最悪だった。誰もが息を殺し、事の成り行きを見守っている。そんな皆の息遣いが聞こえてきそうで、嫌気がさす。会社がどう私を判断しているのか？そんな事を、こんな場面で何故曝け出されなければならないのか。

「私に、彼らの仕事を担当しろと・・・いうお話でしょうか？」

慣れている。こんなことは。今まで何度繰り返されてきたのだから。　部内で新人の仕事だと認識されている仕事であっても・・・だ。本来ならば黙って受けるべきだろう。

『でも、一体いつまで??』
そんな心の葛藤を、見透かしたように口元を緩めながら、上司は言葉を続けた。
「そうだ。この部署に暇なのは君だけだろう?」
何がそんなに嬉しいのだろう・・・緩む口元を手で隠しながら、舐めるような眼で見上げてくる。

もっと業務的に伝えてくれたら、こんなに心が揺らされる事もないのに。上司はおもむろにデスクから、耳かきを取り出し、耳の穴を掃除し始めた。もうこれ以上話す気も無いのだろう。更に左手でパソコンのキーボード打ち付ける。
「・・・そうですか。　・・・今担当している業務の事もありますし。少しお時間を頂いても宜しいでしょうか?」
そう、伝えるだけで精いっぱいだった。
（続く）

第1章　Usual　spot－3

「はぁ・・・。」

その日の夜、行きつけのＢＡＲで、止まらない溜息に友人を付き合わせていた。　同じ会社で働く女性、沙織だ。　営業の前線で戦っている沙織は強くて明るく、会社で一目置かれている存在だった。

部署が違う彼女と、ずっと接点が無かったのだが、経費の精算の件で話した時、

「ねぇ、一度飲みに行かない？」

そう声を掛けられた。うちの会社の女性は、プライベートを重視する傾向がある。そんな中での誘いは正直驚いた。しかし見ため通りの性格に、いつの日か心を許せる唯一の友人になっていった。フロアも違うのに、こんな日には

「飲もうよ」と誘ってくれる。それが単純に嬉しい。

「本当にどうしたいのかしらね、女を。」

彼女のセリフは、何も私だけへの励ましではない。二年前に結婚した彼女は、大きなプロジェクトをあっさりと外された経験を持つ。営業でトップ三の結果を出し続ける、彼女に対する会社の期待は大きかった。女子社員の間では、結婚が過小評価の対象にならないのではないか？女性蔑視の傾向が強い、会社の転換材料になるのではと、ひそかに期待されていた。

しかし会社は、沙織をマネージャーから一般社員に降格させた。会社の言い分はこうだ。

「結婚をした以上　、会社が君に対するリスクを負う事を認識してほしい。」

沙織は、ロックグラスをカタリと傾け、

「大体、あの人にそんな権限あるの？部長に相談しなよ。絶対私

的な意見だって。毎日仕事もせずにインターネットをしているような奴よ。真に受けない方が良いって！」
人の陰口を言わない彼女にしては、珍しい発言をする。勿論、私を気遣う優しさだった。今は沙織の優しさにどっぷりと甘えてしまう。
「会社は私をどうしたいのかな？勿論仕事は一生懸命やるよ。お金貰っているし。　でもあんな言われ方をしなければいけない程、駄目なの？私。
もうどうやっても駄目の様な気がする。　・・・もう・・・ごめん、愚痴だね、これじゃ。せっかく誘ってくれたのに・・・申し訳ない。」
そう頭を下げる私に、
「全然！！聞くつもりで誘ったんだもん。いっぱい話しなよ。」
頷きながら、でも彼女はゆっくりと言葉を繋いだ。
「でも、ね。多分私、敢えて今のポジションを選択したの。会社の歯車として、頑張る事に限界を感じていたし・・・ね。」
そんな選択もあるよと、ヤンワリと言ってくれている。
「そうだね・・・。」
自分に聞きたい・・・私は、どうしたいの？一生働くことに不安がないと言えば嘘になるだろう。でも結婚の予定はないし、繰り返される生活に、劇的な転換期なんて訪れる筈もない。
『だから働いているの？うぅん、そうじゃない。生活の他に大事なものが仕事にはある。』
・・・私の存在価値というのだろうか。しかし、今ではその価値ですら見失いそうになる。　昔は母がそんな存在だった。それが幸せだったのに。一体どうしてこんな事になってしまったのだろう。こんな出口のない、問答を一体いつまで繰り返すのだろうか？

「昔はもっと飲めたのに・・・ごめん。」
「何言ってんの！今日付き合ってくれただけで、助かったよ。本当に楽しかった。スッキリしたしね！！旦那さんに宜しく伝えてね。

」

「ううん、私も一緒に飲みたかったし。また行こうね。」

そう言って彼女は、彼女を待つ家族の元へ帰って行く。

帰宅時の電車の中は、平日の遅い時間だというのに結構混んでいた。ふと窓に映った自分の顔を見ながら思う。

『歳・・・取ったな（疲れ皺が醜く感じて、思わず目を背けた）。

・・・最近、愚痴っぽくて嫌になる。』

この電車みたいに、私の人生の行き着く先が分かっていれば、こんなに不安に成る事もないのに・・・そんな下らない事を考える自分に嫌悪する。考えてどうするのだ。良い事なんて起こる筈もないのに。

（続く）

第1章　Usual　spot－4

一人の部屋に帰った私はベッドに横たわり、何をするでもなく闇に身を委ねていた。いつもは気にならないふりが出来るのに、今日の出来事は無性に私の心に引っかかる。そう・・・こんな夜は困る。この虚無感に結論が出ない、この抜け出せないループが辛い。・・・寝よう。いつか変わる。変わらなくても、私の考えがいつか、変わるだろう。私の世の中に対する矛盾が矛盾でなくなる日が来るから。そう、思いながら目を閉じた。

「やだぁ。ホントに無理。くらーい！」

クスクスと笑う声が、すぐ耳元で聞こえたような気がして、背中がゾクリと冷えた。

『今、何か聞こえなかった？まさか・・・。』

私は一人暮らしだ。しかもここは、マンションの一室・・・現実的にこの声はあり得ない。思わず息が止まる。

・・・気のせい？　動けない。少しでも動いてしまったら、何かが終わってしまいそうな気がした。横を向いたまま自分の心臓の高鳴りに、体が動かない。一瞬、静寂が広がり、暗闇だけが周辺に広がる。

・・・何も聞こえてこない、あるのは暗闇が故の静寂だけ。最近ネガティブな発想に陥りやすいせいか、幻聴まで聞こえる様になってしまったのだろうか。

「はぁ！」

息を止めていた事すら忘れていた。

「大丈夫？私。」

そんな自分に、思わず一人言を呟いた。やっと、呪縛から解き放たれたように、体を捻り天井を見上げた瞬間・・・淡く光る何かが目

の前にいた。いや、浮いていたのだ。
「ぁ・・・。」
淡く光っているのに、闇に対して照らす影響力は無いかのように、その場所だけが淡い光で包まれている。こんな時に何だが、幻想的で美しかった。
どれ位の時間が過ぎただろう。
『・・・もしかしたら、光の屈折？』
そう思える程の長い時間が過ぎ、この奇妙な現象に、恐怖が遠のく様な錯覚に陥り始めていた。
思わず、思わず手を伸ばしてしまった。　あともう少しで、その淡い光に触れようとした瞬間、
「馬鹿なの？」
何の高揚もない、台詞のような言葉が、耳に届いた。
「ねぇ・・・危機感ないの？」
相変わらず、球体は淡い光のままだったが、言葉を発する物体に言葉を無くす。この光の存在自体はあり得ない。　・・・とうとう、私おかしくなってしまったのだろうか？会社はどうしよう。友人は悲しむだろうか？生活出来なくなっちゃうな。あーきっと誰かに迷惑をかけてしまう。こんな状況下で、漠然と考えながらその光を見つめていた。
「危機感があったら、不用意に触ろうなんてするの？今自分の気持ちの衝動だけで、動いているみたいだけど　、全てにおいてそうなの？」
・・・私の中の声なのだろうか。だとすると、随分と容赦がない。
「そう・・・かもね。」
その光は明らかに失望しているかのような声を上げた。あまりに流暢に会話が続くものだから、会話をする事に違和感が無くなっていた。
「貴方に言いたいのは、自分のルールが世界の常識って思っていないかって事よ。私のルールから言えば、未知数の物体に自ら触れ

る行為は自殺行為だと思うし　、貴方を支配している絶望も、貴方だけのルールにがんじがらめに縛られているように感じるけど？
　そもそも、未知数の物体に安易に触れる行為が、この世の中の常識だというのなら、私のルールがおかしい事になるけどね。」
　この物体の言葉は、至極当然だった。お酒のせいかもしれない。恐怖よりもこの物体の発する言葉に、気持ちが反応してしまう。
「私を支配している絶望？」
「状況はどうにでもなるのに、周りが変わる事に期待するが故に生まれてくる、絶・望。」
グッと手に力がこもり、体全体にじんわり嫌な汗を掻く。こんなお決まりのセリフに、いちいち熱くなってどうするのだ。そう思いながらも、感情が先に立つ。
「っ・・・！　私は、私のルールでこんな状態になっているわけじゃ、ない！確かに全て私が選んできたわけだけど、世の中には不可抗力で、どうにもならない事があるの！　嫌なら辞めることも選択肢の一つだなんて、他人だから言える言葉よ！　生きていかなきゃいけないのに・・・。　私は、私の限られた資源の中で出来ることをやっているだけよ！」
　激しく高鳴る心臓が、今にも爆発しそうだ。
（続く）

第1章　Usual　spot－5

光は、くっくっと笑いながら、上下に震え、そして・・・
「ぷっ！　あーははは。それって自分の中で使いならされた言葉？そうやって自分に言い訳しながら生きてきたの？もう！ヤダ～。」

「・・・は？」
この夢か妄想から、正直早く覚めたかった。何故、どうにもならない現状を、こんな状況で否定されなければならないのか。この声が自分自身としても、息をするのも苦しくなる程悔しくて仕方がない。可笑しくて仕方がないと言わんばかりに、光の玉は未だに上下に震えている様子を見て、屈辱から布団を頭から被った。
・・・寝よう。病気のことは、明日考えよう。明日の朝、このままだったら病院に行こう。これからの事も、明日ちゃんと考えよう。全ては明日だ。
「・・・。」
部屋に静寂が訪れ、自分の息遣いしか聞こえてこない。布団の中で、少し息苦しさを感じながら、どうかこのまま寝てしまいたい。このまま光が消え失せて、私をかき乱す余計な事を言わないように、ただただ祈っていた。
しかし、そんな私の願いも虚しく、
「ねぇ・・・。」
自分の心の声なのか、光は執拗に話し掛けてくる。
「この状態を無視して、寝てリセット出来るなんて思っている時点でおかしいでしょ？」
『違う！！これは夢だから！！！』

微動だにしない私に向かって、淡々と言葉を繋ぐ光に、ジワリと嫌な汗をかく。こんな非現実をどう受け入れればいいのだろう。

先程の怒りの感情は通り過ぎ、今は明日から直面するであろう現実に、言葉が見つからずにいる。
「・・・ふぅ。幻像でも、夢でもないわよ。私は。」
布団をはぐ事も出来ず、それでも光の発する一言一句を逃さぬように、全神経が言葉を追うのだ。一体、何がどうしてしまったのだろう。
「大体、皆自分がおかしくなったか、夢かって思うのよねぇ。確かにこの世界では現実的ではないかもしれないけど、全く他の発想は出来ないものかしら？　自分達の世界が全てだと思っている、人間らしいと言えば人間らしいのかしらねー。」
布団を上げる事も出来ずに、布団の中の暗闇を凝視し続ける。
『・・・やばい・・・。本気でやばい。現実逃避もここまで来ると、救い様が無いんじゃない？
これって日常生活が出来るレベルなのかな。どっちにしても、人に迷惑は掛けない様に・・・しなきゃね。』
頼れる親戚なんて、知り合いなんていない。明日までこの状態が続くようであれば、正気の内に対策を取らなければ、真剣にそんな事を考えていた。

布団に包まったまま、反応しない私にお構いなく光は語り続ける。私に言い聞かせる訳ではないのかもしれない。まるで独り言のように、ブツブツと呟いているのだ。
「そもそもー、この生きにくい世界に固執して生き続ける理由はなに？　生きとし生ける者が、純粋に生きている事が、自然の摂理ではないの？　何故どう生きているのか？が、重要になるのか理解出来ない。
考える事を与えられた人間の悲しいサガ？生きている事が一番重要ではないの？　その理由すら追及せずに。・・・一生自分は幸せではないと考え続けるの？」
光の問いかけに、自然に体が動いた。私は光と対面し、私は無意

識に大きな息を吐いた。
「私に、何が言いたいの？」
（続く）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8274x/

エンダ

2011年10月28日13時08分発行